

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 16 日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24520072

研究課題名(和文)古代キリスト教思想におけるフィランソロピア概念の受容史

研究課題名(英文)History of the reception of the concept of philanthropy in the ancient Christian thought

研究代表者

土井 健司(DOI, Kenji)

関西学院大学・神学部・教授

研究者番号：70242998

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：古代キリスト教における「フィランソロピア」概念の受容史は以下ようになる。2世紀の使徒教父、弁証家においてこの概念はキリスト教独自のものと捉えられていないが、フィロンの影響を受けたアレクサンドリアのクレメンスにおいてはじめてフィランソロピア論が形成された。キリストの救済の働き、さらに救貧を含む愛の業に使われている。また3世紀半ばのキュプリアヌスの疫病関連文書では、信徒の看護の働きについて類縁概念のフィラデルフィアが使われ、4世紀初頭の同様の記事におけるフィランソロピア概念の使用につながる。これらが受肉論を含めたカッパドキア教父の救貧としてのフィランソロピア論の背景にあつと確認された。

研究成果の概要(英文)：The history of the reception of philanthropia in the ancient Christianity is depicted as followed. Though there are no sentences on philanthropia in the Apostolic Fathers, we can find some sentences in the Apologetics. But they did not use the concept in their own way. There was not a Christian theory on philanthropia in them. In the writings of Clemens of Alexandrine we can find the Christian theory on philanthropia for the first time. Incarnation and the act of love, especially the love of the poor have been included in this concept there. In the period of Cyprian plague the Christians ventured to nurse the patients at the risk of their own lives. These acts were depicted as philadelphia in a letter of Dionysius of Alexandrine which is similar to philanthropia. We can find these acts mentioned as philanthropia in the Palestine plague in the 4th century. We think these usages have prepared the Cappadocian thought on philanthropia which was based on the doctrine of incarnation.

研究分野：宗教学

キーワード：フィランソロピア アレクサンドリアのクレメンス キュプリアヌスの疫病 弁証家 使徒教父 新約外典

1. 研究開始当初の背景

本研究は、2008年度から2011年度にかけての科学研究費助成事業「四世紀カッパドキア三教父による救貧の思想と実践」につづくものである。

この先立つ研究において、カッパドキア三教父(カイサレアのバシレイオス、ナジアンゾスのグレゴリオス、ニュッサのグレゴリオスの三名の総称)の救貧思想の鍵となる概念がフィランソロピア(人間愛)であり、このフィランソロピアがフィロプトキア(貧者愛)になるところにその特徴があるとの結論を得た。フィランソロピアとは「人間愛」を意味するが、問題となるのは愛される対象としての「人間」とは誰のことか、である。なぜなら一見すると普遍的に見えても、その実は対象となる「人間」が様々に限定されるのが通常であったからである。たとえばアテナイ人にとってフィランソロピアの対象となるのは、同胞のアテナイ人に限られていた。しかしカッパドキア教父はこの「人間」をこともあろうに「貧者」と捉えていくのである。「貧者」とは、ある時は物乞いのことであり、またレプラを患う病貧者のことであり、これら貧者とキリストを重ね合わせることで「貧者」がフィランソロピアの対象としてその中心にもたらされる。貧者とキリストの重なりは、神であるキリストが人間になったという受肉論に基づき、あるいはマタイ福音書25章40節の「これらのひとりにしたことは私にしたこと」というイエスの言葉に拠っているのであった。

以上が先立つ研究の主な成果であったのだが、このようなカッパドキア教父のフィランソロピアという言葉の使い方の由来、歴史を尋ねる必要を覚え、2012年度からの研究開始を目指して本研究を申請した。

2. 研究の目的

本研究は、カッパドキア教父のフィランソロピア概念の至る、古代キリスト教思想におけるギリシア語の「フィランソロピア」の受容史を明らかにしようとするものである。というのも古代ギリシアにおいて生まれ、一般に文化、文明を意味するフィランソロピアなる概念は、新約聖書においては三つの用例が認められるのみにとどまり(使徒27章3節、同28章2節、テトス書3章4節)決して聖書的な概念ではないからである。

そこで第一の問いは、聖書的とは言えないこの概念をカッパドキア教父が用いることができるためには、この概念が歴史的にどのようにキリスト教において受容されていったのか、である。ギリシア・ローマ社会においてフィランソロピアの対象となる「人間」は社会的・経済的に一定の立場、地位にある者であるのに対し、カッパドキア教父においては「貧者」という社会の周縁的存在なのである。

そこで第二の問いは、一体どのような経緯、

前史があってこの転換が生じたのか。これらを明らかにすることが研究目的であった。なお元来この概念は、もともと古代ギリシアにおいては、プロメテウスなど神々の人間に対する愛好・鼻屑を意味するものであったことを付記しておく。

3. 研究の方法

ギリシア語文献データベースである「TLG」を用いてそれぞれの文献における用例をすべて取り出して、用法研究を実施した。対象としたのは、使徒教父(二世紀前半)、ユスティノスなどの弁証家(二世紀)、また新約外典(二世紀以降)、そしてアレクサンドリアのクレメンス(二世紀から三世紀)であった。当初の研究計画では、クレメンスについてオリゲネスを研究する予定であったが、残存するオリゲネスの著作の多くがラテン語訳であるため、フィランソロピア概念の用例を集めることが現実的には予想以上に困難であったこと、さらにクレメンスを研究することでカッパドキア教父のフィランソロピア論の基本となるものが見出されたためオリゲネス、またグレゴリオス・タウマトウルゴスについての調査・研究は一旦中止とした。

なお用法・意味を明らかにするため、フィランソロピアの主体(愛する者)と客体(愛される「人間」とは誰か)に焦点を絞り、その意味を確定する方法も用いた。たとえば王が家臣に対して「フィランソロピア」を行う場合、その意味するところは「特権の付与」である等等。またキリストが主体となり、人間全体に対するフィランソロピアが語られる場合には、フィランソロピアは「救済の働き」を意味するといえる。つまり「人間愛」といっても様々な意味が認められるのである。

さらに用法研究だけでは、フィランソロピア概念の意味の深みにたどり着けないと考え、「キプリアヌスの疫病」という出来事について、看病したキリスト者の有り様を研究し、これを「フィランソロピア」概念と関連づけた。これについて、もっとも重要な史料はエウセビオスの『教会史』に採録されているアレクサンドリアの監督ディオニュシオスの二通の復活祭書簡である。まず「キュプリアヌスの疫病」の実態を、さまざまな史料ならびに当時発行された疫病平癒を祈願したローマ貨幣をもとに考察した。この疫病におけるキリスト者のフィランソロピアについては、トゥキュディデスの描く「アテナイの疫病」の記事との比較をおこなった。なお具体的にディオニュシオスの書簡で用いられているのは「フィラデルフィア」(兄弟愛)であるが、対象が「キリスト者」に限定されるのか、ひろく「人間一般」を指すのかの違いを除けば、フィラデルフィアもフィランソロピアも同じ意味内容のものである。つまりフィラデルフィアとは主として信仰の兄弟

姉妹であるキリスト者を対象とし、フィラソロピアはキリスト者であるなしを問わず、すべての人に向かった愛という違いがあるが、これを除けばその意味するところは等しいと見なすことができる。

なお期間延長を行って研究した偽クレメンス文書については、フィラソロピアの用例をすべてチェックし、一つひとつテキスト考察した。これによって特徴をいくつか挙げることができた。

4. 研究成果

新約聖書において三例しか見られない「フィラソロピア」は、二世紀のキリスト教世界ではまだ外来の概念であり、独自の意味をキリスト教思想において獲得してはいない。使徒教父文書には用例がなく、ユスティノスをはじめ弁証家においても断片的な用例ばかりで多用されず、特定のフィラソロピア論は見られない。さらに救貧の記事はあるものの、その関連でフィラソロピアを論ずるテキストも見られない。弁証家においては「弁明」に資する外向きの概念としての使用が認められるばかりであった。(論文「使徒教父と弁証家におけるフィラソロピアの用法と救貧思想」を参照。)

また新約外典(二世紀以降)においてもキリストの救済の業をフィラソロピアとするテキストが見いだせるものの、とくに注目し値するテキストは見いだせなかった。(論文「新約外典文書におけるフィラソロピアの用例」を参照。)

これに対してキリスト教的フィラソロピア論の先鞭をつけたのは、フィロンの影響を受けたアレクサンドリアのクレメンスであった。「TLG」によるとフィラソロピアの使用数は84回に上り、この点だけでも以前の著作家との差は歴然としている。そこで論じられている意味としては、神、とりわけ救い主キリストについて使うテキストがもっとも多く、1)神の本質、2)神の働き、3)公平性、4)神のフィラソロピアと厳格さ、5)神の受肉、さらに人間同士のフィラソロピアとしては、6)救貧、以上が挙げられる。そこで、とりわけ受肉を指してこの概念を使うこと、さらに救貧についても用例が見られることはカッパドキア教父のフィラソロピア論への影響をうかがわせる。(なおこの研究は別途論文として発表することなく、拙著『救貧看護とフィラソロピア』第2章として書き下ろした。)

さらにフィラソロピアの具体的内容、行為について探求を深めるため、「キュプリアヌスの疫病」と「パレスチナの疫病」においてキリスト者の看護の行為がフィラデルフィアやフィラソロピアと述べられている記事を考察した。とくにアテナイの疫病に関するトゥキュディデスの『歴史』の記事との比較をとおして、フィラデルフィア(フィラソロピア)が病者に近づき、身体的な看護

(遺体の埋葬を含む)を表現する言葉であることが確認された。すなわちトゥキュディデスの記事をもとにしてディオニュシオスは疫病の看護の部分を書いており、トゥキュディデスが病者から遠ざかる人びとを描いたのにたいして、ディオニュシオスは病者に近づくキリスト者を描くのである。これは思想の表現というよりも、具体的な行為の内的評価にかかわり、フィラソロピアがこのような次元で使用されることを確認することができた。(論文「「キュプリアヌスの疫病」考 - 古代キリスト教におけるフィラソロピア論のための予備的考察」を参照。)

以上アレクサンドリアのクレメンス、疫病記事においてカッパドキア教父のフィラソロピア論の前提となるものを確認することができた。即ち受肉のフィラソロピア、救貧としてのフィラソロピア、さらに看護としてのフィラソロピア(パシレイオスの病院事業に対応)これらが一体となっていく。こうして四世紀になると教理論争の過程のなかで受肉論をもとにフィラソロピア論もさらに発展していき、カッパドキア教父において受肉論をもとにフィロプロキア(貧者愛)としてのフィラソロピア論が確立したものである。そこで2008年度から2011年度の科学研究費助成事業の主要な成果と本研究を合わせて、『救貧看護とフィラソロピア 古代キリスト教におけるフィラソロピア論の生成』を上梓することができた。

なお研究期間を延長して研究を継続したのは、偽クレメンス文書のフィラソロピア論を考察するためであった。その理由は、偽クレメンス文書の『講話』のなかに人間全体まで対象をひろげる独自のフィラソロピア論が存在するからである。このようなフィラソロピアを主題とする文献は古代キリスト教においては珍しいものであり、古代キリスト教におけるフィラソロピア受容史のどこに位置づけるべきかと検討する必要があるからであった。

アレイオス派の影響が認められる偽クレメンス文書の『講話』には、ユニークなフィラソロピア論が認められるが、そこでは愛敵を中心としたフィラソロピア論が形成され、貧者愛の主題は言及されるにとどまり、後退している。さらに受肉論としてのフィラソロピアを語るテキストが見られない。受肉論がそのフィラソロピア論に欠如していることは特異な現象であって、背教者ユリアヌス帝のフィラソロピア論との関係を想定することが可能であるとの結論を得た。少なくとも今回の研究成果について何かしら変更を要求する類の文献ではないと考えられる。(論文「人であるかぎり人を愛する フィクレメンス文書『講話』におけるフィラソロピア論」を参照。)

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

1. 土井健司 人であるかぎり人を愛する
フィクレメンス文書『講話』におけるフィラ
ンスロピア論、『基督教学研究』第36号、2017
年発行予定(印刷中). 査読なし

2. 土井健司 「キュプリアヌスの疫病」考
- 古代キリスト教におけるフィランスロピ
ア論のための予備的考察、『神学研究』第62
号、2015年、25 - 39頁. 査読なし

3. 土井健司 新約外典文書におけるフィラ
ンスロピアの用例、『神学研究』第61号、2014
年、145 - 152頁. 査読なし

4. 土井健司 使徒教父と弁証家におけるフ
ィランスロピアの用法と救貧思想、『神学研
究』第60号、2013年、41 - 51頁. 査読な
し

〔学会発表〕(計2件)

1. 土井健司 救貧看護とフィランスロピア、
日本キリスト教福祉学会、2016年6月25日、
関西学院会館「光の間」(兵庫県西宮市)

2. 土井健司 アレクサンドリアのクレメン
スにおけるフィランスロピア論、神学研究会、
2013年7月24日、関西学院大学(兵庫県西
宮市)

〔図書〕(計1件)

1. 土井健司 『救貧看護とフィランスロピ
ア 古代キリスト教におけるフィランスロ
ピア論の生成』、創文社、2016年(全体309
頁).

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

土井 健司(DOI, Kenji)
関西学院大学・神学部・教授
研究者番号:70242998

(2)研究分担者 なし

()

研究者番号:

(3)連携研究者 なし
()

研究者番号:

(4)研究協力者 なし
()